



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チュヴァシの口碑におけるヴォルガの表象 : 歴史の記憶と想像力についての考察
Author(s)	後藤, 正憲; Goto, Masanori
Citation	北方人文研究, 3, 1-14
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42935">https://hdl.handle.net/2115/42935</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JCNH3_001.pdf



# チュヴァシの口碑におけるヴォルガの表象

## — 歴史の記憶と想像力についての考察 —<sup>1)</sup>

後藤 正憲

北海道大学スラブ研究センター 特任研究員

### 1. はじめに

文字を媒体にした記述＝記録の行われぬ、いわゆる無文字社会の文化や歴史の研究では、口碑あるいは口承文芸と呼ばれる文化的表象が、当該社会の姿を知る上での手掛かりを与えるものとして取り上げられることが多い。例えば川田は、文字によって行われる意思的、個別的な表明と対比して、彼が文化の「無文字性」と呼ぶものに無意識的、集合的な構造を見出し、そうした「無文字性」を体現するモデルとして口碑を取り上げている（川田 1976：229）。またその一方で、彼は口碑が担う「ことば」による理解を、人間の五感の働きや身体的作用といった、「ことば」によらない感覚にまでつながる連続性の中に位置づけている。その上で彼は、口碑から身体的感覚にわたる連続性の上に、複数の人間に共有される「集合的記憶」を伝承するという共通の機能を見出している（川田 2009）。

しかし、口承の文化的表象を「集合的記憶」の伝承という機能に集約させる見方は、口碑・口承文芸に見出されるもう一つの重要な側面を見落とすことにつながる。口碑には、過去にあった歴史的事実を表わすという表象作用の他に、超自然的な潜在性を想像的に実現させることによって、現実世界の認識を新たに構成し直すという作用を併せ持つことが指摘される。本稿は、ロシアのヴォルガ中流域に位置するチュヴァシに伝わる口碑の中から、ヴォルガ川にまつわるいくつかの例を取り上げ、その考察を通して、口碑の想像的な表象の側面に光を当てることを目的とする。

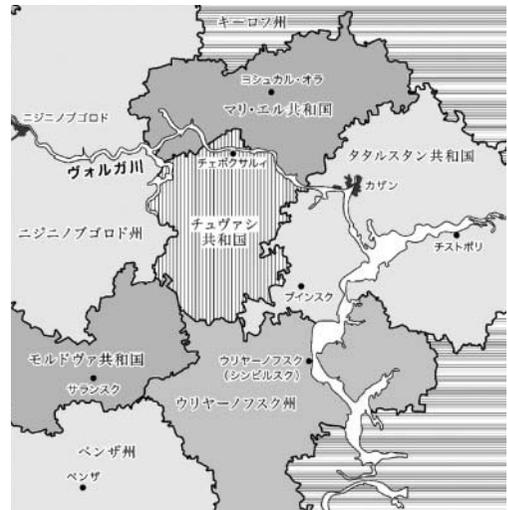
ヴォルガに関連する口碑の事例から導き出される特徴を理論的に考察する上では、ボガトウイリョフ (P. Bogatyrev) やムカジョフスキー (J. Mukařovský) ら、プラハ言語学サークルによる記号論の議論が参照される。先に挙げたような、口碑の機能を歴史の伝承に集約させる見方では、口碑はそれが伝わる社会の歴史を構造的に体現した「集合的な記憶」の表象とされる。一方、ボガトウイリョフやムカジョフスキーらの議論においても、芸術作品や日常生活の中に見出される記号が十全な働きをするためには、「集合的な意識」に適合していることが条件とされる。しかし、彼らの想定する「集合的な意識」は、決してそれだけで完結するものではなく、むしろ規範に合わず意識に上らないような外部をも含めた、重層的な理解がなされている (Matejka 1976)。歴史の「集合的な記憶」に還元されることのない、口碑の想像的な側面について探究する上では、こうした現実の重層的な捉え方への配慮を備えた議論が必要となる。

## 2. チュヴァシにおける口承の歴史的背景

まず、簡単に地理的・歴史的背景の状況を確認しておきたい。チュヴァシ共和国は、モスクワからおよそ600 km 東にあるチェボクサルイ市を中心として、ヴォルガ川以南（一部以北の土地を含む）、スラ川以東に広がる、およそ18300 平方 km の面積（四国の面積よりやや小さい）の土地を占める。共和国内で暮らす約130 万人の人口のうち、およそ67%のチュヴァシ人と26%のロシア人が大半を占める（Vasil'eva 2000: 21）。共和国の名称を表す民族が全人口の中で占める割合は、周辺の共和国と比べても、チュヴァシでは幾分高いことが特徴的である。

チュヴァシの位置するヴォルガ川中流域は、民族や言語、宗教などの文化的要素の多様性が顕著である。言語に関して言うと、ロシアはスラヴ語系、マリとモルドヴァがフィン・ウゴル語系に属するのに対し、チュヴァシはタタールとともにテュルク語系に属す。ただし、チュヴァシ語の表記法が確立したのは民族的な意識の高まった19世紀末になってからのことであり、早くから文字表記に親しんでいたロシアやタタールの場合と大きく異なっている<sup>2)</sup>。

当該地域では言語を表記する文字の有無は、宗教的な環境の違いと相関性を持つと考えられる。16世紀半ばにロシアに編入されて以来、キリスト教化の進んだチュヴァシでは、ムスリムの比率が高いタタールと違って、住民のほとんどがロシア正教を受容した。しかしそれと同時に、人々の日常的な習慣の中には、16世紀以前のモンゴル・タタール汗国時代やそれ以前のブルガル王朝時代のイスラムの要素とともに、土着の宗教的要素が多く残っていた。隣接する諸民族の宗教的起源について、チュヴァシ人の間に伝わる次のような逸話は、ロシアやタタールとは異なるチュヴァシの宗教的事情をよく表している。昔、神がそれぞれの民に信仰を分配することになったとき、ロシア人、タタール人、チュヴァシ人が同じ小屋に泊まった。翌朝早く「今すぐ神様のところに本をもらいに行け」という梟の声が聞こえた。短い靴（ガロッシュ）をはいたタタール人は誰よりも早く神のところへ駆けつけ、本（すなわちコーラン）と3人の妻をもらった。その次に駆けつけたのは長靴を履いたロシア人で、本（聖書）と妻を1人もらった。一方、チュヴァシ人は脚絆を巻き、わらじ（ラプチ）を履くのにすっかり手間取ってしまい、その間に神は待ちきれなくなって、本を残して去ってしまった。しかも、ようやくチュヴァシ人がたどり着いたときには、その本もすでに牛や羊に食べられてしまっていた。そのおかげでチュヴァシ人には法典がなく、死ぬときに裁かれることがない反面、その生活は悪い神霊たちの意のままになったという<sup>3)</sup>。この逸話では、ロシア正教ともイスラム教とも異なる土着の宗教性が、言葉を表記する文字の欠如と結び付けて描かれている。「チュヴァシの言葉は牛のお腹の中」といった言い回しは、その後生まれた近代的な文学作品の中でも、いわば自嘲気味に用いられている<sup>4)</sup>。



ヴォルガ川中流域地図

こうした文字の欠如についての意識は、隣接するロシアやタタールについての情報が比較的得やすくなった近代以降に、自らを反省的に捉える視点から生まれてきたものだろう。一方、従来チュヴァシの口承の世界では、その宗教性とも深い関わりを持つ独自の領域が発達していた。その担い手の一つとして、今日でも広く人々の信頼を集める占い師の存在を挙げることができる。本稿では、口碑に関する議論の起点として、チュヴァシの占い師が唱えたとされる邪視祓いの呪文を、まず取り上げてみたい。

### 3. 占い師の呪文とその解釈

チュヴァシの占い師は、かつてユモシュ (iumăš) と呼ばれ、チュヴァシの信仰実践において重要な役割を果たしていた。今日でも病気や災いが起こったとき、チュヴァシの人々はその原因と対処法を求めて、しばしば占い師のもとを訪ねる<sup>5)</sup>。ユモシュは、糸の端に結わえたパンの小片の揺れ具合を見て占ったり、鏡や硬貨の翳り具合を見て占ったりするなど、様々な手法を用いたト占によって人々の相談に応える。占い師の行う対処法としては、供犠・供物の指定、原因の除去、呪文の誦唱などが挙げられる。中でも呪文は、ト占から治病までの過程で常にともなうものであり、ユモシュの実践に不可欠の要素となっている。一方、邪視はチュヴァシのみならず世界的に見られる観念で、他人の眼差しの力によって病や災いが引き起こされるといえるものである。

一般的に、人から受けた邪視を祓うためにユモシュが唱えたとされる呪文には、ヴォルガを越えて移動する特徴的な人物が登場する。次はその部分を切り取ったものである。

#### 〈例1〉

... Атӑл урӑӑ, Сӑр урӑӑ	Из-за Волги, из-за Суры	ヴォルガを越え、スラ川を越えて、
Аша патман карчӑк килнӑ.	Прибыла старуха Аша патман.	アジャバトマン婆さんがやって来た。
Çаваренче пӑр шӑӑл,	Во рту единственный зуб,	口には歯が一本、
Кутӑнче пӑр тӑк.	В заду единственный волос.	お尻には毛が一本。
Çав тетӑрет, çав кӑларат...	Она выкуривает, она изгоняет.	彼女が燻して [病を] 追っ払う。

(Mesarosh 2000: 266)<sup>6)</sup>

呪文には様々なバリエーションがあり、紹介される事例によって少しずつ違っているが、その一方で多くの事例にいくつかの共通点を見出すことができる。ヴォルガを越えて来た老婆（バリエーションによっては老人）が登場することがその一つで、その形象は多くの邪視祓いの呪文に共通して見られる。またそれに対して「歯が一本、毛が一本」（他のバリエーションでは「金の歯、金の毛」、さらに同じ内容で銀、銅…と繰り返される）のように同じ形容詞が反復され、いわゆる「貫通修飾語」(skvoznoi epitet) が用いられている (Bogatyrev, 1954: 225; ボガトウイリヨフ 1988: 99)。また次のバリエーションで端的に表されているように、ユモシュは自らの行う動作の主体を、呪文の中の人物に転位させる。

## 〈例2〉

Эп вёрместёп, эп сурмастап, Не я заклинаю, не я плююсь,                   私が呪うのではない、私は唾しない、  
 Атл йәләмәнчен, Сәр йәләмәнчен, С левобережья Волги, с левобережья Суры,   ヴォルガの対岸から、スラの対岸から、  
 Ашпатман карчак килет,           Идет старуха Ашпатман,                   アジャバトマン婆さんがやって来る、  
 Çав вёрет, çав сурать.           Она заклинает, она плюется.           彼女が呪い、彼女が唾する。

(Ashmarin 2003: 321)

ユモシュはその治病術の様々な動作（乾燥したきのこを燻す、唾を吐く、息を吹きかける、呪文を唱える等）をしながら、それは自分がやっているのではなく、ヴォルガの向こうから来た人物がやっているのだと言うのである。呪文が形式的な文体を持つものであるとしても、なぜわざわざこのような謎めいた人物に主体のすり替えがされなければならなかったのだろうか。そもそも、ヴォルガの向こうから来た「アジャバトマン」とはいったい誰なのか？

チュヴァシ語話者にも馴染みのない、独特の響きを持つ名前のこの人物については、かつての民族誌家たちも頭を悩ませていたようである。例えば、20世紀初頭にチュヴァシに滞在し、多くの口碑を収集したハンガリー人民族誌家ジュラ・メサロシュ（Gyula Mészáros）は、邪視払いの呪文に出てくる「アジャバトマン」について、少なからずスペースを割いて解説している。それによると、奇妙な名前を持つ老婆「アジャバトマン」のモデルは、昔名の知られていた治病師で、ユモシュの先駆者に当たる人物に見出される。ちょうどトランス状態のシャーマンによって精霊の幻覚が引き起こされるように、ユモシュの呪文によって過去の著名な治病師が呼び起こされているのだという（Mesarosh 2000: 263）。一方、全17巻におよぶチュヴァシ語辞典を編纂したアシュマーリンは、「アジャバトマン」をマホメットの妻「アイシャ」と娘「ファティマ」の結合したものとしている（Ashmarin 1929: 211）。

これらいずれの解釈も、それなりに理にかなったものではある。ユモシュが治病師として果たしていた役割に焦点を合わせれば、その先駆者がモデルだとするメサロシュの説は相応に説得力を持つ。また、チュヴァシ人がブルガル王朝時代からモンゴル・タタール汗国時代にかけて、イスラム教を柱とする国家に統治されていた歴史的事実を思い起こすなら、その宗教的権威の付与された女性の名前を組み合わせることによって、そこから驚異的な力を引き出そうとしていたと考えても不思議ではない。ただいずれにしても、どこに焦点を置くかという違いを抜きにすれば、メサロシュとアシュマーリンの両者とも、過去の特定人物あるいは特定の時代についての記憶が、ユモシュの呪文に織り込まれているとする見方を示している。

しかし、本論であえて問題としたいのは、果たしてチュヴァシの治病術の現場ではいったい何が想起されていたのかということよりも、むしろある特定の表象がどのように呼び起されるのかという、想起のメカニズムを捉えることである。この想起のメカニズムを捉えるための手立てとして、次に記憶と表象の間に見出される関係についての議論を取り上げてみよう。

#### 4. 記憶と表象：川を越えることの意味

ブラハ言語学サークルの一員で、ロシアの民族誌学者 P.ボガトウイリョフは、口碑・口承文芸に関する論文「創造の特殊な形態としてのフォークロア」（1929）を、ヤーコブソンと共同で著した。その中で彼らは、口碑では文字を媒体にした文学に比べて、作者による個人的創意が作品に反映さ

れにくく、共同体の規範に則した制約的体系の枠内で存続するとしている (Bogatyrev 1971; ヤーコブソン 1985)。フォークロアは「共同体の前もっての検閲」を通り、社会的規範に合うものだけが受容され伝承される。逆に、新たに生み出されたものが規範にそぐわない場合には、忘却へと追いやられる。

同様にスペルベル (Sperber 1985) も、口碑の伝統においては社会的に記憶されやすいものが表象となって現れるという。ただしその記憶は、出来事が直線的に想起されることによって、直接表象につながって現れるのではない。むしろ、完全には理解されず、適格な表象が形成されない情報を処理する能力として、彼が「メタ表象能力」と呼ぶものが、すぐれた受容性を引き出すのだという (Sperber 1985: 83)。スペルベルはこの「メタ表象能力」を、子供が大人の顔をのぞきこんで、そこにある表象性を認める能力を引き合いに出して説明している。例えば、子供は身近な人の死を即座に理解することはできないが、葬儀に参列する大人たちの表情が何かを表わしているということについては、敏感に感じ取ることができる。彼によると、子供が大人の表情に読み取るような「メタ表象能力」は、単なる想起 (recollection) にとどまらず、呼び起こし (evocation) の力を持ち、結果としていっそう記憶を強めることになる<sup>7)</sup>。

スペルベルはこのような「メタ表象能力」の及ぶ範囲として、まるで理解も表象もできないカオスのような状態を想定しているのではない。彼は、一方で主体の他の心的表象と密接に関わるものであり、他方で決して最終的な解釈が与えられない「適切な神秘」こそが、最も喚起力のある表象として文化的に受け入れられるという (Sperber 1985: 85)。つまり、ある表象が広く行き渡るには、それがただ漠然と神秘的であればよいというのではなく、その社会で有意性をもっていることがカギとなる。

このことは、タウシグが「暗黙の社会的知識」という表現を使って議論している内容に近い。彼によると、「暗黙の社会的知識」は、理由や方法がよく分からないまま人を突き動かし、現実を現実的に、正常を正常にしてしまう。本質的に分節不可能で論証的でない、社会的な相関性についてのイメージによる知識で、歴史と記憶の相互作用によって形作られるものである (Taussig 1987: 366-367)。

タウシグもスペルベルと同様に、代価を払って抑圧されていたものを解放するというエコノミーに回収されない記憶のあり方を、認識の「神秘的なひらめき」に見出している (Taussig 2000: 269)。つまり、表面から隠されていたものを、労力を費やして掘り起こした見返りとして、現実の記憶が回復されるのではなく、瞬間的なひらめきの中に現実の記憶が投影されるのである。彼は海辺の表象に関する論考の中で、記憶と記憶されること (所記と能記) の間に、模倣による結合が点火 (喚起) され、そこに認識が「第二の自然」として瞬間的に現れてはまた突然消えてしまうことに、歴史の主要な現象を見出している。

ところで、チュヴァシに伝わる伝説の中では、しばしばものや人が「ヴォルガを越えること」に、スペルベルのいう「適切な神秘性」が与えられている。ただし、単に川を渡って移動するのではなく、瞬時に「越える」のである。ヴォルガのような巨大河川の場合、このことは超自然的な意味合いを持つ。例えば、モルガウシ地方に伝わる「澄んだ湖」の伝説は、「ヴォルガを越えること」による超自然的なモチーフが土台となっている。

### 〈例3〉

サナトリウムのそばに、とても水の澄んだきれいな湖があった。昔、周辺の土地を耕してい

た人が、馬に犁をつけたままその湖で水を飲ませていると、突然馬が犁もろとも水底に沈んで姿を消した。村人たちは湖をよく探したが、人も馬もどこにも見つからなかった。ところで、そこからヴォルガを挟んで対岸の土地に、やはり「澄んだ湖」と呼ばれる透き通った湖があったが、犁をつけたまま沈んだ馬は、なんとそのヴォルガ対岸の湖で見つかったということだ<sup>9)</sup>。

また、「川を越えること」の神秘性が表わされている例として、ヴォルガの盗賊にまつわる次のような伝説を挙げることができる。

#### 〈例4〉

昔、ヴォルガ右岸にチュラバトル (Chura pattār) という名の盗賊がいた。彼にはヴォルガ左岸に二人の仲間がいて、それぞれアマクサリ (Amaksar)、フィルドウ (Khyrtu) というところに住んでいた。彼らはともに、ヴォルガ川を航行する商船を襲って暮らしていた。この3人は一本の大きな斧を共有し、必要なときはヴォルガ川越しに一方から他方へ投げ渡して使っていた。ヴォルガを挟んで斧を投げあう巨人の表象は、チュヴァシの伝説的英雄伝の典型的モチーフになっている (Dimitriev 1986: 50)。

この伝説にある「チュラバトル」は、もともとタタールやカザフなどテュルク系民族の叙事詩に描かれる英雄で、通常大きな斧を身につけているのが特徴とされることから、それがチュヴァシの伝説の中にも受容されたものと思われる<sup>9)</sup>。他民族の英雄叙事詩がチュヴァシに受容される過程で、祖国を守る勇士がヴォルガ川の商船を荒らす盗賊に変容しているのは、チュヴァシ周辺の水運における当時の治安状態が反映されたものと考えられることもできるだろう。しかし、この伝説が外来のモチーフを受容しながら、チュヴァシに固有なものとなっていることの最大の決め手は、複数の登場人物がヴォルガの兩岸から一本の斧を互いに投げ合って渡しているという、空想的な情景が加味されている点にある。ここでは英雄叙事詩のストーリー性が背景に退き、代って「川を越えること」の神秘性が前景化している。

「澄んだ湖」やヴォルガの盗賊にまつわる伝説のいずれの例も、現実には接することのない二つの異なる空間が、ヴォルガ川という自然の障壁を越えて瞬時につながれることによって、特有の神秘が引き出されている。これらの例に鑑みるならば、前節で取り上げたヴォルガを越えてやって来る老婆「アジャバトマン」は、「川を越えること」という「適切な神秘性」を与えられたものだったと言えるだろう。そうだとすれば、チュヴァシの占い師が「アジャバトマン」の形象をもとに手繰り寄せようとしていたのは、過去の記憶というよりも、むしろ川の向こう岸という「第二の自然」を喚起する力だったとみるべきである。

## 5. 喚起することの反復

ヴォルガ対岸の想像力に見られるような、「適切な神秘性」の持つ喚起力は、単に過去を想起することにも増して、人々に反復を促すものである。このことを確認するために、もう一度占い師の呪文に着目しよう。メサロシュによると、「言葉を知っている」(chēlkhine pēlet) ということが占い師の特別な能力とされていた (Mesarosh 2000: 220)。占い師の呪文では、「ヴォルガを越えてやって来る老婆」のような言葉の表す意味内容が神秘性を持っていただけでなく、言葉そのものがスベ

ルベルやタウシグのというような意味での神秘性を引き起こすものだったことが指摘できる。そのスケールの大きさは、次のようなチュヴァシの諺からも伺える。

〈例 5〉

Чѣлхе Атáла та картлать Язык может даже Волгу 言葉はヴォルガをも堰き止める  
теççĕ. перегородить, говорят. (Romanov 2004: 98)

この諺では、占い師の言葉 (chĕlkhe) が「ヴォルガを堰き止める」という超自然的な現象を引き起こす点に、神秘性が見出される。このことは、同じヴォルガが堰き止められるのでも、自然に即した形で起こる現象と比べた場合により明確になる。ヴォルガは毎年冬には凍って堰き止められるが、そのような自然の営みに対しては、宗教的な意味合いが付与されることはあっても、決して神秘的な意味づけがなされることはない。次の例に見る談話は、このことを明確に表している。

チュヴァシでは、しばしばキリスト教の諸概念が従来の価値観に沿って受容されたが、その中でもとくに聖ニコライは、ヴォルガの交通を助ける「神」として信仰を集めた。このロシア正教の聖人に関して、帝政末期の民族誌家マグニツキイは、チュヴァシ人による次のような談話を記録している。「聖ニコライの祭日 [現在の暦で 12 月 19 日に相当] になると「神」[聖ニコライのこと] が来てヴォルガを凍らせる、そうすれば荷馬車が通り、穀物の値段も決まる」(Magnitskii 1881: 218)。つまりこの談話は、川の凍結のように自然の営みによって両岸が結ばれ、川を渡って移動することができるのであれば、なんら神秘性は喚起されず、日常の経済活動と結びついた宗教的言説の範囲内で理解されるということを示している。一方、占い師の言葉は超自然的な現実を呼び起こし、自然界では起こり得ないような現象を「第二の自然」として瞬間的に認識させるがゆえに、宗教的理解を越えた神秘性を生み出している。

超自然的な現実のイメージによって引き出される神秘性は、自然と超自然の境界が時代とともに推移しても、それにほとんど影響されることなく、繰り返し喚起される。その興味深い例を、ソ連の社会主義建設におけるチュヴァシ人の業績を宣伝するために書かれた、啓発用の本の文章に見出すことができる。この本が出版された 1980 年には、かつての人々の想像力をまさに現実に変える巨大ダム建設と水力発電所の基礎工事が、チェボクサルィ市郊外で進んでいた。今や、かつて占い師の言葉が放つ神秘性ととも喚起された超自然的現象が、まさに自然の風景と変わろうとしていたのである。次にあげる文章は、その中でガガーリン、チートフ (いずれもロシア人) に次ぎ、世界で三番目に宇宙を旅したチュヴァシ人宇宙飛行士 A. N.ニコラーエフを称える文章である。

〈例 6〉

Космос... Самое популярное слово последних лет. Слово древнее и юное одновременно. Оно пришло к нам из далекого далека, в ореоле романтической недосыгаемости, и простым смертным, «земным» было недоступно. Оно было чем-то сродни мечте, это слово, и долго считалось лишь источником вдохновения поэтов и романтиков. И, как говорится, на наших глазах и в наших устах вдруг стало оно совсем земным.

宇宙…。近年広く行き渡るようになったこの言葉。非常に古いものでありながら、同時に年若くもある言葉。それは遠く空想的な至上の栄光に包まれ、人知の及ばぬはるか彼方から我々のもとにやってきた。それはほとんど夢に近く、長い間ただ詩人やロマンチストの靈感の源とされていた。それが今や、我々の目に映ったり口から飛び出したりして、この言葉が突如まったく地上のものとなった。

(Ivanova and Ivanov 1980: 80)

多くの人にとって、宇宙は依然として身の回りの自然から遠く離れたものである。そればかりか、物理的に言っても宇宙が「地上のもの」では有り得ない。しかし、同族の士の成し遂げた偉業に熱狂する言葉は、宇宙のような遠大な空間をも越え、地上の世界と宇宙とを一つに結ぶことによって、この時代に有意な「第二の自然」を呼び出している。技術が進歩するにともなって、従来の「適切な神秘性」の喚起する力が次第に失われると、今度は別の事象に「第二の自然」が呼び起こされ、再び神秘性の喚起が反復されている様を、この事例は如実に示している。

## 6. 認識の弁証法

時間や空間を遠く隔てた場所についての超自然的なイメージが、瞬時のひらめきによって呼び起こされ、「第二の自然」として再自然化される過程を、タウシグはベンヤミンの概念を借りて「弁証法的イメージ」の作用に位置づけている (Taussig 2000: 254 ほか多数)。超自然的な認識は瞬間的に現われ、また突然消えてしまうことによって、前とは異なる自然性を得る。

このように、異なる自然性の間を行き来することによって現実の認識が成り立つ状況は、初期のフーコーが精神病の患者について議論する立場に通じるものである。そこで彼は、精神病を「身体機能の喪失」という自然性に還元する見方を批判し、病のポジティブな側面とネガティブな側面の弁証法的な反応に注意を促している。あらゆる社会的行為は常に二重性をもつものであり、むしろ「裏側」のある行為を統合するための社会的発展のなかに病を組み入れなければならない (フーコー 1997: 50)。このような二重性を、鷲田は「共軛的な関係」と表現している (鷲田 1997: 74)。この場合の「共軛」とは、もともと<sup>きょうやく</sup>を共にして車を引くという意味で、緊密に結びついて相互に転化し合うような二つの概念を表している。

さらにこれと関連するものとして、チェコスロヴァキアの民衆演劇についてボガトゥイリョフが指摘する現実と演出の二重性、いわゆる「弁証法的アンチノミー」が挙げられる。民衆演劇では、役になりきる俳優の感情や、舞台上の出来事を現実と捉える観客の知覚はともに明滅しており、それが芝居の中の演技であるという意識と、現実に起きていることだという意識が、交互に現れては消える (ボガトゥイリョフ 1982: 43)。言い換えれば、人々の意識においては、同じものの上でも異なる二つの側面が弁証法的に作用することによって、一つの現実世界が形作られている。

これら三者の議論に共通して見られるのは、今ここにある現実とは別の側面をも踏まえて、少なくとも二重に構成されたものとして現実を捉える見方であり、そうした異なる側面が互いに明滅して、弁証法的に新たなイメージが認識されるとしている点である。こうした議論を応用するならば、チュヴァシの口碑においてヴォルガの対岸は、今とは異なる現実の「裏側」を体現する世界として捉えられているということが出来る。チュヴァシの口碑に表わされた現実の「裏側」は、次の歌の歌詞にあるように、ある面で野生のイメージをとまなう。

## 〈例7〉

Атӑл леш йенче сын сасси,	На той стороне Волги человеческие голоса,	ヴォルガの向こう岸に人の
Сын сасси мар, пурт сасси;	Не человеческие голоса, а стук топора.	声、人の声かと思ったら、斧
Атӑл ку йенче сын сасси,	На этой стороне Волги человеческие голоса,	の音。ヴォルガのこちら岸に
Сын сасси мар, чан сасси та	Не человеческие голоса, а колокольный звон и	人の声、人の声かと思ったら
йыт сасси.	собачий лай.	ら、教会の鐘の音に、犬の鳴
		き声。

(Ashmarin 1929: 142)

この歌では、ヴォルガの対岸には人が斧をふるう野生の土地が広がっているのに対し、こちら側は人々の暮らす日常世界として歌われている。ヴォルガを挟む両岸が、それぞれ人間世界と野生の土地に区分されることは、この歌のバリエーションでヴォルガの向こう岸の音が「ゴーゴー」(kēr sassi : kēr は風や水の激しく流動する様を表す擬態語)、こちら岸が「ワンワン」(khum sassi : khum は犬の鳴き声を表す)と表されていることから裏付けられる (Zaitseva 2004: 314)。さらに、次のようななぞなぞ遊びを挙げることができるだろう。

## 〈例8〉

Атӑл урлӑ лӑпсӑр-лӑпсӑр	Через Волгу тащится косматый	ヴォルガを渡る毛むくじゃらの熊、な
упа қаҫат. (Утӑ лавӑ)	медведь... (Воз с сеном)	あんだ? (干し草を積んだ荷車)。

(Ashmarin 1929: 142)

このなぞなぞでは、干し草をたくさん積んだ荷車を後ろから見たところから連想される毛むくじゃらの熊は、その獣性が野生の土地であるヴォルガ対岸と結びつけられている。

このように、日常世界とは別の側面として野生のイメージが与えられるヴォルガ対岸は、その一方で同時に、新たな認識を開く土地でもある。次の諺は、今とは別の認識が開かれる空間として、ヴォルガ対岸が想像されていたことを示している。

## 〈例9〉

- |   |   |           |
|---|---|-----------|
| • Атӑл урлӑ қаҫсассӑн ӑс кӑрет.           | • Если переедешь Волгу, ума прибавится.                 |           |
| • Атӑл урлӑ қаҫсассӑн алӑ тӑслӑ ӑс кӑрет. | • Как переедешь Волгу, пятьдесят новых мыслей появится. | ヴォルガを渡れば、 |
| • Атӑл урлӑ қаҫсан тин ӑс кӑнӑ.           | • Только по переезде через Волгу за ум хватился.        | にわかに知恵が湧  |
|   |   | いてくる。     |

(Romanov 2004: 109)

これらの諺から、ヴォルガの対岸は日常の生活とは区別される野生性が「第二の自然」として呼び起こされる土地であると同時に、今とは異なる新たな認識に人を導く可能性を秘めた土地として、想像されていたことが分かる。

## 7. 結語

口碑、あるいは口承文芸は、過去の古い時代から語り継がれ、後世に伝えられてきた。歌や諺、言い伝えとして口にされる言葉は、いわゆる伝統を体現するものとして世代から世代に受け継がれてきたものであり、文字による記録に代わる記憶の伝達手段として捉えられやすい。しかしこの場合、単に過去にあった具体的な事柄を時間的・空間的に固定された情報として残すことを記憶と捉えるならば、社会的に有意とされる神秘性を喚起するという、口碑によって実現されるもう一つの重要な作用を見落とすことになるだろう。

タウシグは、本論で取り上げた「暗黙の社会的知識」について敷衍して述べる際に、バルトの「鈍い意味」の概念を用いている (Taussig 1987: 366)。この「鈍い意味」という概念は、バルトが映画の記号的要素を分析する中で、コミュニケーションのレベルと象徴的なレベルからともに区別される「意味形成性」のレベルの不完全な記号として措定した、「第三の意味」を言い換えたものである (バルト 1998)。しかしタウシグは、それを記号の明確な意味に対比されるカーニバル的な意味として用いており、バルトが意図していたような三項対立の見方をとっていない。

そのため「暗黙の社会的知識」へのアプローチとしては、むしろ大平の解説するムカジョフスキーの「非意図性」の概念のほうが妥当である (大平 2001、2006)。作品の中で作用する意味的統一に抵抗する力としての「非意図性」は、統一された意味を確保しようとする「意図性」の努力があってこそ機能する。芸術作品において「意図的なもの」と「非意図的なもの」が、弁証法的緊張関係を結びながら作品を創造的な生の現実として知覚させるように、文化的表象においては目の前に広がる現実と、違ったようにありえたかもしれない蓋然性が表裏をなして、人々に認識される。

このムカジョフスキーの概念をわれわれの議論に引き寄せてみるならば、次のように言うことができるのではないだろうか。すなわち、口碑・口承文芸の「意図的なもの」としての側面が、歴史を伝承するという機能に見出されるとするならば、その一方で、社会的に有意な神秘を喚起することによって現実の異なる側面へと人々を導き、そこから新たな認識を開く可能性に、「非意図的なもの」としての側面が見出されるのではないか。ヴォルガ川にまつわる口碑に見出される「対岸の想像力」は、この「非意図的なもの」としての側面を示しているように思われる。

本論で取り上げたチュヴァシの呪文や歌、諺、伝説など、口碑に表わされるヴォルガの表象は、過去のある時点における川の状況が直線的に想起されることによるよりも、むしろその向こう岸が今ある現実の「裏側」に当たるものとして人々に想像されることによって形作られている。そうした対岸のイメージは、ムカジョフスキーのいうような「非意図的なもの」として人々に喚起され、今ここにある現実をいっそう強固なものにしている。ヴォルガの両岸になぞらえられるように並行する現実の二重の側面は、チュヴァシの人々の認識に交互に現われては姿を消すことを繰り返しながら、人々の記憶に刻まれ継承されている。

## 注

- 1) 本稿は、科学研究費補助金基盤研究A「ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究」の一環として行われた合同研究会「ロシアへのまなざし・ロシアからのまなざし—プラハ、そしてヴォルガ」(2009年8月1日、於神戸大学)での報告をベースに、まとめたものである。
- 2) チュヴァシ語の表記法形成の経緯については、次の文献に詳しい (Krueger 1961: 65)。

- 3) ロシア正教長司祭としてチュヴァシで長く暮らし、そのかたわら民族誌的な資料を多く残した V. Ia. スメーロフが、ツイヴィリスク郡およびチェチューシスク郡北部で採録したもの (Smelov 1880: 530)。
- 4) 例えば、チュヴァシで近代文学の祖とされるシェシュベル (Šešpël Mishshi, 1899-1922) が、1921 年に書いた戯曲「ウビク」の冒頭に見られる (Šešpël 1999: 97)。
- 5) チュヴァシにおける卜占の歴史と今日の実践については、後藤 (2009) を参照。
- 6) 以下、横三連に並列して表記するテキストは、左から順にチュヴァシ語、ロシア語、日本語のテキストを示す。横二連の場合は、ロシア語と日本語を順に並べてある。ちなみに、チュヴァシ語には母音に挟まれた子音が濁音化するという規則があるため、例えば Ашпатман が「アシャパトマン」ではなく「アジャバトマン」となる。本稿では、チュヴァシ語をカタカナ表記する場合には、綴りよりも発音に近い表記をとった。
- 7) ヤーコブソンやボガトゥイリョフらとともにプラハ言語学サークルで活躍したムカジョフスキーは、視覚芸術が言語と比較して「呼び起こし」の作用を持つことを指摘している。彼によると、言語的な記号が自らの外部にあるものを伝達する働きをするのに対し、芸術的な記号としての視覚芸術は、そこに描かれるものにとどまらず、身の回りの現実全体に対する姿勢を、受け手の内部にじかに呼び起こす (Mukařovský 1976: 237)。
- 8) モルガウシ地方カルシュラフにおける聞き取り (2005 年 8 月)。
- 9) チュルク系民族の叙事詩における「チュラバトル」の形象については、研究会の会場において須貝真澄氏からご教示をいただいた。また、中央アジアの各地に伝わる当該の叙事詩を網羅的に取り上げて分類し、その地域的な特徴を細かく整理した坂井 (2000) の論考を参照のこと。

## 参考資料・文献

Ashmarin, N. I.

1929 *Slovar' chuvashskogo iazyka. vyp. II*, Kazan.

2003 "Vvedenie v kurs chuvashskoi narodnoi slovesnosti," in N. I. Ashmarin, *Chuvashskaia narodnaia slovesnost'*. Cheboksary (first published in Cheboksary, 1923.)

バルト、ロラン

1998 「第三の意味」、『ロラン・バルト映画論集』(諸田和治訳) ちくま学芸文庫、pp. 11-52。(Roland Barthes, "Le troisième sens. Note de recherche sur quelque photogrammes de S. M. Eisenstein," *Cahiers du cinema* 222, juillet 1970.)

Bogatyrev, P. G., ed.

1954 *Russkoe narodnoe poeticheskoe tvorchestvo*. Moscow.

Bogatyrev, P. G.

1971 "Fol'klor kak osobaiia forma tvorchestva," in Bogatyrev, *Voprosy teorii narodnogo iskusstva*. Moscow, pp. 369-383. (mit R. Jakobson, "Die Folklore als eine besondere Form des Schaffens," *Verzameling van Opstellen door Outleerlingen en Bevriende Vakgenooten Donum Natalicium Schrijnen* 3, 1929.)

ボガトゥイリョフ、P.

1982 『民衆演劇の機能と構造』(桑野隆訳) 未来社。(P. Bogatyrev, "Narodnyi teatr chekhov i slovakov," in Bogatyrev, *Voprosy teorii narodnogo iskusstva*. Moscow, 1971.)

1988 『呪術・儀礼・俗信 — ロシア・カルパチア地方のフォークロア』(千野栄一、松田州二訳) 岩波書店。(P. Bogatyrev, *Actes magiques rites et croyances en Russie Subcarpathique*. Paris, 1929.)

Dimitriev, V. D.

1986 *Chuvashskie istoricheskie predaniia. chast' 2*, Cheboksary.

フーコー、ミッシェル

1997 『精神疾患とパーソナリティ』（中山元訳）ちくま学芸文庫。（Michel Foucault, *Maladie mentale et personnalité*, Presses Universitaires de France, 1954.）

後藤正憲

2009 「実践としての知の再／構成 — チュヴァシの伝統宗教とト占」『スラヴ研究』56、pp. 157-178。

Ivanova, Valentina, and Mikhail Ivanov

1980 *Raduga nad Volgoi*. Moscow.

ヤーコブソン、ロマーン

1985 「創造の特殊な形態としてのフォークロア」、川本茂雄編『ロマーン・ヤーコブソン選集3 詩学』大修館書店、pp. 12-26。（Roman Jakobson, mit P. Bogatyrev, “Die Folklore als eine besondere Form des Schaffens,” in Jakobson, *Selected Writings IV. Slavic Epic Studies*. The Hague, Paris: Mouton & Co., 1966.）

川田順造

1976 『無文字社会の歴史 — 西アフリカ・モシ族の事例を中心に』岩波書店。

2009 「伝承と集合的記憶 — 予備的覚え書き」『口承文藝研究』32、pp. 1-9。

Krueger, John R.

1961 *Chuvash Manual: Introduction, Grammar, Reader, and Vocabulary*. Bloomington: Indiana University.

Magnitskii, V. K.

1881 *Materialy k ob''iasneniiu staroi chuvashkoi very*. Kazan.

Mesarosh, Diula

2000 *Pamiatniki staroi chuvashkoi very. Perevod s vengerskogo*. Cheboksary (Mészáros Gyula, *A Csuwas ősvallás emlékei*, Budapest, 1909.)

Matejka, Ladislav

1976 “Postscript. Prague School Semiotics,” in Ladislav Matejka, and Irwin R. Titunik, eds., *Semiotics of Art: Prague School Contributions*. Cambridge, Massachusetts, and London: The MIT Press, pp. 265-290.

Mukařovský, Jan

1976 “The Essence of the Visual Arts,” in Ladislav Matejka, and Irwin R. Titunik, eds., *Semiotics of Art: Prague School Contributions*. Cambridge, Massachusetts, and London: MIT Press, pp. 229-244. (“Podstata výtvarných umění,” lecture delivered on 26 Jan. 1944. First published in Mukařovský, *Studie z estetiky*, Praha, 1966.)

大平陽一

2001 「映画的《剰余》の時代錯誤的な再定義について：バルトの《第三の意味》とムカジョフスキーの《非意図性》」『天理大学学報』198、pp. 39-62。

2006 「映画を観ること — 意図性と非意図性」、箭内匡編『映画的思考の冒険 生・現実・可能性』世界思想社、pp. 79-108。

Romanov, N. R.

2004 *Vattisen sãmakhësem, kalarãshsem, sutmalli iumakhsem. Chuvashskie poslovitsy, pogovorki i zagadki*. Cheboksary.

坂井弘紀

2000 「テュルク英雄叙事詩の地域的特徴：『チャラ=バトゥル』の分類をもとに」『地域研究論集』3(2)、pp. 95-122。

Šešpěl Mishshi

1999 “Upik,” in Šešpěl, *Šyrnisen pukhki*. Cheboksary, pp. 97-103.

Smelov, V. Ia.

1880 “Nechto o chuvashskikh iazycheskikh verovaniiax i obychaiakh,” *Izvestiia po Kazanskoj eparkhiei* 20, pp. 528-543.

Sperber, Dan

1985 “Anthropology and Psychology: Towards an Epidemiology of Representations,” *Man (NS)* 20(1), pp. 73-89. (ダン・スペルベル〔菅野盾樹訳〕『表象は感染する 文化への自然主義的アプローチ』第3章、新曜社、2001年、pp. 95-129.)

Taussig, Michael

1987 *Shamanism, Colonialism, and the Wild Man; A Study in Terror and Healing*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

2000 “The Beach (A Fantasy),” *Critical Inquiry* 26, pp. 248-278.

Vasil'eva, Ol'ga

2000 *Chuvashskaia respublika: Model' etnologicheskogo monitoringa*. Moscow.

鷲田清一

1997 『現象学の視線』講談社学術文庫。

Zaitseva, E. A.

2004 *Morgaushskii raion. Traditsii, obriady, prazdniki*. Cheboksary.

# Representation of the Volga in the Oral Tradition of the Chuvash, Russia:

## A Study of Historical Memory and Imagination

Masanori GOTO

Research Fellow, Slavic Research Center, Hokkaido University

There is a common belief that oral tradition is a vehicle for the conservation and transmission of people's memories of the past. The relation between human memory and oral tradition, however, cannot be reduced to the historical representation. Oral tradition is not only a representation of the past, but also a manifestation of imaginative reality. This paper discusses the imaginative aspect of oral tradition by examining various examples of the Chuvash, in Russia.

The Chuvash oral tradition has many examples of some person or thing crossing over the Volga which elicits special meanings. In those examples, both sides of the Volga, which are distant from each other, in fact, are connected for an instant, imaginarily. A person or a thing, which was on one side of the Volga, is found in the next moment on the other side, and consequently conjures up a mystic effect. Such an imagining of supernatural phenomena as an instantaneous connection of both sides of the large river functions as a "relevant mystery" in the Chuvash oral tradition. This "relevant mystery" is a critical element in cultural representation to evoke other phases of things, and consequently to consolidate the awareness of reality.

Especially, the semiotic theory of such members of the Prague Linguistic Circle as P. Bogatyrev and J. Mukařovský is useful in considering the functions of the representation of the Volga in the Chuvash oral tradition. Their semiotic theory is characterized by its underlying notion of the dialectical relationship between at least two irreducible functions of signs. When taking their semiotic notion into consideration, the Chuvash oral tradition cannot be reduced to a simple representation of human memory. Oral traditions concerning the Volga illustrate how cultural representation as oral tradition is composed not only of human memory, but also of human imagination of the other side of present reality.